

親しい人間関係における談話標識について

—若年層友人同士と中高年夫婦の談話を比較して—

渡 邊 千 晶 川 口 良

The Use of Discourse Markers in the Close Human Relations Conversation:

Comparing the Discourse of Young Friends and a Middle-Aged Couple

WATANABE, Chiaki, KAWAGUCHI, Ryo

This paper aims to clarify how discourse markers are used in close human relations, and researches using the discourse data of the free conversation by two friends in their 20s and a couple in their 50s. Contrary to the preceding discussions, it was found that the friends in their 20s used discourse markers more frequently than the couple in their 50s in conversation. This result is supposed to reflect not the difference of the age but the close human relations, i.e. husband and wife. Therefore, it is suggested that the closer human relations, the less use of discourse markers. Besides, the couple used “*de*” as a marker indicating the start of a new topic. The two friends used “*demo*” when they turned back to the topic which the partner had talked about, but the couple didn’t use the marker in this sense. Hence it is considered that the use of the discourse marker “*demo*” is related to the need for consideration in the human relations.

1. はじめに

親しい友人同士などの自由な会話では、話し手、聞き手の双方から様々な話題が提供され、会話参加者は多くの情報を共有しながら会話を進めていく。それまでの情報を理解し、会話の進行にしたがって次の話題を導入していくわけだが、会話参加者は、会話の円滑な進行と双方の理解促進のために、無意識にさまざまな工夫を凝らしていると考えられる。その方法の1つに「談話標識 (discourse marker)」がある。

「談話標識」とは、「談話の中で、話者が情報内容以外にその内容を効果的に伝えるために相手に送る信号 (マーカー)」(琴 2005b : p.2)であり、「その会話の内容理解を助ける」「会話者間のやりとりをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」(西野 1993 : p.89)ものである。『応用言語学事典』(2015 : p.280)では、「談話標識」の機能について、次のように述べられている。

日常の談話行動では、その参加者は理解と産出の双方において談話内での文の構成単位や構造の一貫性を明らかにすることが大切である。その際、談話標識と呼ばれる言語形式が発話を相互に関係づけ、談話内の境界を示し、談話の流れを決めたり、その一貫性の度合いを示し、談話の相互作用を円滑に運ばせるために必要な情報を提供したりする。談話標識は話し手のメッセージをコンテキスト化する指示機能を持つ「場面の手がかり」(contextualization cue)の1つとも言われる。

(p.280)

「話し手のメッセージをコンテキスト化」するための「場面の手がかり」を与えるものが「談話標識」であるとなれば、一見無秩序に会話

が進行するように思われる「親しい人間同士の自由会話」においてこそ、「談話標識」は、談話展開の有効な手立てとして機能しているのではないだろうか。本稿では「親しい人間関係」の談話において用いられる「談話標識」に注目し、そこで用いられている「談話標識」が談話内においてどのように機能しているか明らかにすることを目的としている。

これまで「親しい人間関係」としては、「友人同士」が取り上げられることが多かったが、「親しい関係」と一口に言っても、そこにはさまざまな対人関係が存在し、親しさの度合いや世代の相違によっても、談話を展開する方法は異なると思われる。そこで、本稿では、20代の友人同士と50代の夫婦の自由会話の談話資料を用いて、その中で用いられる「談話標識」を分析することによって、「親しい人間関係」における「親しさの度合い」と「年代の違い」が談話展開にどのような影響を与えているか探ることを試みる。

2. 先行研究及び研究課題

2.1 先行研究

本稿と関わる先行研究として、「談話標識の世代差」に関するものと「夫婦の談話」に関するものを取り上げる。

「談話標識の世代差」に関する先行研究は、管見では琴（2005a、2015、2018a）に限られる。これらの研究では、調査者と対象者間の談話が分析対象となっている。まず、琴（2005a）は、仙台方言の高年層、若年層話者の談話標識の出現傾向について調査し、談話標識の出現頻度は若年層に比べ高年層の方が多いいことを明らかにした。次に、琴（2015）は、東京地域の高年層、若年層の談話標識の出現傾向を比較し、説明的場面で使用される談話標識の出現傾向とその用いられ方の違いについて調査した。その結果、談話展開の方法には世代差が認められ、それに伴って

談話標識の出現頻度も若年層において減少する傾向があることを指摘している。さらに、琴（2018a）では、大阪方言の高年層と若年層の談話展開の方法を比較し、説明的場面で出現した談話標識について調査した。その結果、談話標識は高年層で多用される傾向があり、若年層においては少なくなると述べている。つまり、琴（2005a、2015、2018a）からは、地域の違いにかかわらず、若年層より高年層のほうが談話標識の出現頻度が多いと言える。

一方、「夫婦の談話」に関する先行研究も限られており、談話標識に関するものは管見では見当たらなかった。そのため、ここでは「夫婦の談話」を分析した川崎（1983）及び本田（2016）を挙げる。まず、川崎（1983）は、意識調査と実際の発話の両面から、「夫婦語」の特徴を見ている。東京在住の1組の夫婦の発話資料を用いて、互いの呼称やトピック、会話の進行、丁寧語の使用などに関する特徴を分析した結果、夫婦の会話は、両者ともに気楽な話し方をすることが多く、日常生活の行動に付随した話題がどこにでも挿入され、次々にトピックが変換されることが確認されたという。川崎（1983）は、「一定の人間関係による会話の分析の必要性」（p.87）を主張している。本田（2016）は、50代夫婦の自然会話を観察し、一見テンポよく会話が進んでいるように見えても、内容的には食い違いが生じている談話例を挙げている。そのような事態にもかかわらず談話の継続が可能であるのは、互いに、相手の発話にあらわれた単語を自身の発話に取り込んで重ねるという、「発話の重なり」を効果的に用いているためではないかと結論付けた。

2.2 研究課題

以上の先行研究を見ると、談話標識の出現傾向について、世代差に関する研究は琴（2005a、2015、2018a）に限られ、人間関係の「親しさの

程度」に関する研究は確認できなかった。そこで本稿では、世代が異なる、親しい人間同士の談話で用いられる談話標識の出現傾向を分析し、世代差と人間関係の違いが談話標識の用い方に及ぼす影響について明らかにすることを目的として、以下の2点を研究課題として設定する。

- (1) 「親しい人間関係」において用いられる談話標識に、「親しさの程度」による違いはあるか。
- (2) 「親しい人間関係」において用いられる談話標識に、「世代」による違いはあるか。

本稿は、上記の研究課題の手がかりを得るために、20代の友人同士1組と、50代夫婦1組の談話を用いて分析するケーススタディである。

3. 調査概要

談話資料として、20代大学院生の友人同士（友人歴4年）1組の談話Aと、50代夫婦（結婚歴24年）1組の談話Bを用いる。この談話資料は、「約5分程度自由に会話をしてください」という指示のもとに行われた自由会話を録音し、その音声データを、高崎他（2008）を参考にして文字化したものである。録音に当たっては、調査協力者に口頭で本研究の目的を説明し、調査協力の同意を得た。収録時期は、談話Aが2018年6月、談話Bが2019年1月である。談話資料の詳細について、表1に示す。

表1. 談話資料の概要

	話者	年齢	性別	出身地	職業	収録場所
談話A	a	24歳	男性	埼玉県	大学院生	大学 院生室
	b	24歳	女性	千葉県	大学院生	
談話B	c	56歳	男性	福島県	会社員	福島県 自宅居間
	d	54歳	女性	福島県	看護師	

4. 調査結果

4.1 20代友人同士と50代夫婦の談話標識の出現頻度

まず、談話A、談話Bの談話資料から談話標識と思われる言語形式を抜き出し、比較した結果を表2に示す。

表2. 20代友人同士と50代夫婦の談話標識の出現頻度

品詞	談話標識	談話A		談話B	
		話者a	話者b	話者c	話者d
接続詞	で/でえ	4			1
	それで		1		
	(ん) じゃあ/じゃあじゃあじゃあ		2	1	
	だから	1		1	1
	しかも		1		
	でも	1	6		1
	だけど	1			
	だって				1
	ただ				1
てか	1				
副詞	まず		1		
	とりあえず	1	1	1	
	やっぱり				1
感動詞	いや/いやいやいや/いいや	2		2	3
	ほら				1
	ほう			1	
	ねえ	1			
終助詞/ 間投助詞 など	ね/よね/じゃない/じゃん/でしょう (ノ)*	23	14	1	4
	合計	61		21	

* (ノ) は上昇調を示す

談話A、Bでは18種類の談話標識が用いられていたが、談話Aで使用されたのは14種類、総使用頻度61回であるのに対して、談話Bで使用されたのは8種類、総使用頻度は21回であった。談話標識の種類、使用頻度ともに、談話Aすなわち20代友人同士の談話の方がかなり多く、20代友人同士の使用頻度は50代夫婦の約3倍であることが分かる。この結果は、琴（2005a、2015、2018a）が示した、「地域の違いにかかわらず若年層より高年層のほうが談話標識の出現頻度が多い」という結果とは反対のものである。その要因を明らかにするために、以下、各談話を質的に分析することにする。

例1は20代友人同士の談話A、例2は50代夫婦の談話Bの一部である。以下、談話例中の下線部は談話標識、「hhh」は笑い声、（ ）は短時間に挿入された相づち、「…」はポーズ、[]は発話が重なった部分、「。」は直前の発話が下降調の抑揚であることを示す。

例1. <20代友人同士の談話A>

- 3 a なにが起こったかという、ね
- 4 a 北越谷駅から文教大学に来るまでの（うん）間に（うん）
- 5 a 僕のサンダルが壊れてしまいました。
- 6 b hhh何で今日車じゃないの？
- 7 a 今日はちゃんと電車で来ました。
- 8 b ああ、なるほどね。
- 9 a さすがにね、なんかねえ、うちの父親がねえ
- 10 b うん
- 11 a なんか、定期買ってんだから電車で行けよって（hhh）、うん、
まあそう
- 12 b ついに言われたんですね。

- 13 a いや、車で行ったらガソリン代かかるし、駐車場代かかるし、うん、ね、ケチだなあと思いながら
- 14 b (hhh) 確かに
- 15 a まあ、そんな感じでね、はい、電車で来ました。
- 16 b おお
- 17 a でえあれですよ、どの辺かな、半分ぐらい来た時に(うん)鼻緒っちゅうの、止めてるところ(おう)、ねえ、外れてしまったんですよ。
- 18 b (hhh) まじか
- 19 a そう、そんなことがあったんです。

例1では、車で登校している話者aが今日は電車で来て、話者aの履いていたサンダルの鼻緒が切れたという話題が導入される部分である。話者aは3a～15aで、電車で来た理由を説明しているが、3a「なにが起こったか」というと、ね」9a「さすがにね、なんかねえ、うちの父親がねえ」15a「そんな感じでね」と、間投助詞「ね」を頻繁に用いて相手を話題に引き込もうとしたり、「なんか」(9a、11a)や「まあ」(15a)のようなフィラーを用いて円滑に会話を進めようとしていたりしていることが見て取れる。そのあと、17aで「でえあれですよ、どの辺かな、半分ぐらい来た時に鼻緒っちゅうの、止めてるところ、ねえ、外れてしまったんですよ」と、鼻緒が切れた時の状況の説明を始めている。ここでは談話標識「でえ」が本題の説明を開始することを示すマーカーとして機能していることが分かる。

例2. <50代夫婦の談話B>

- 38 d 2万ぐらいかなって思ったんだけども

- 39 c 今割り切れねえのはダメとかっていうのはねえんだべ、もう
40 d うん、だからもういい感じかなーと思って。
41 c うん…まあ2万で良いんじゃないね。
42 d ただ、友達だから3万持ってっかなってって言ってた。
43 c んじゃ 3万でいいべした。
→ 44 d うん、どういう字書くんだったけ、○○ちゃんって
45 c えっと「み」はなんだ「海」…いいや、平仮名でいい
46 d うん
→ 47 c うん、そう、筆のこう読めないように。3年前の
48 d 3年前hhh。
49 c 部屋のゴルフバッグがこれ [3年] くらい前から使ってて、
はい
50 d [え?]
51 c はい、とりあえず返しておきます。

例2では、はじめに、夫婦の娘が友人の結婚式に持参する祝儀の金額について話をしている。話者cが43c「んじゃ 3万でいいべした」で「んじゃ」を用いてそれまでの話の帰結として「3万」を導き出すと、話者dは44d「うん」と返事したあと、突然「どういう字書くんだったけ、○○ちゃんって」と、お年玉を入れる袋に書く名前の字を聞いて、話題を転換している。さらに話者cも、47cの途中から「3年前の」と話し始め、49c「部屋のゴルフバッグがこれ3年くらい前から使ってて」と、全く異なる話題を導入している。44d、47cにはどちらも話題転換を示す談話標識はないが、45c、48dは特に戸惑った様子もなく(48dは47cの「3年前」を繰り返すことによって話題転換を確認している)、それぞれが持ち出した新しい話題について発話を続けていく。これは、2.1で見

た川崎（1983）の、「日常生活の行動に付随した話題がどこにでも挿入され、次々にトピックが変換される」という夫婦の会話の特徴と同様の談話展開と言える。

フォローアップインタビューで、話者c、dは「普段から相手の話す内容についてはあまり注意しておらず、自分が聞きたいと思った話題にだけ意識を傾けている」「話すこと自体に満足感を得ている」と述べていた。つまり、夫婦間では互いの話題に対する関心度が低く、談話全体の一貫性を構築するという意識が希薄であるため、談話標識の使用頻度が下がるのではないか。高年層であっても、日常生活を共にする夫婦という「親密度の高い」人間関係の談話では、談話標識によって談話の展開を予測させたり、情報の共有を確認したり、円滑に会話を進めようと配慮したりする必要性は低いことが推測される。

以上のことから、琴（2005a、2015、2018a）とは反対に、本談話資料において若年層のほうが高年層より談話標識の使用頻度が高いのは、世代による違いというよりは、「親しい友人同士」と「夫婦」という人間関係の違いによるものと考えられる。高年層と言っても、「夫婦」という親密度の高い関係性が談話標識の使用に大きな影響を及ぼしていると考えられることから、同じ「親しい関係」であっても、関係性が近ければ近いほど談話標識は使用されなくなる傾向が示唆される。

4.2 談話標識の用い方の違い

表2を見ると、談話A、Bの談話標識の出現頻度の違いとして、終助詞・間投助詞以外では、接続詞「で／でえ」と「でも」が挙げられる。接続詞は談話展開の一貫性を保つために使用されるものであり、受け手にとっても「次に送り出す情報をまとめる指針とすることができる」（岩澤 1985：p.48）重要な談話標識と言える。以下、「で」「でも」に注

目し、談話A、Bの用法について質的な分析を試みることにする。

4.2.1 「で」について

「で」は「それで」の省略形であり、話し言葉のみで用いられる。琴(2018a)は「ソレデ」の機能について「話の先頭に現れ、説明を開始する。また、談話の途中に現れ、説明を累加する。」(p.233)と述べ、また、梅棹忠夫他『日本語大辞典第二版』(2000：p.1270)には、「それで」の用法として以下の3つが挙げられている。

- (1) 前に示された内容の帰結を示す。
- (2) 前に示された内容を受けて、新しく発展させることを示す。
- (3) 相手の発言を促していることを示す。

(p.1270)

「それで」の省略形「で／でえ」は、20代の談話Aで4回、50代の談話Bで1回使用されており、20代の方が50代より多く用いていた。以下にそれぞれの例を示す。

例3. <20代友人同士の談話A>

- 106 b あ、そっか手続きの [やつがあって]、
107 a [先月のやつも] 貰ってないし
108 b オーノー
→ 109 a で、あとそっちはねー取っとく用の銀行口座に入ってる。
110 b あ、うんうんうん。
111 a そ、収入少ないのに口座2つ持ってんの。
112 b hhh

- 113 a 貯金用と使う用と。
114 b うー [ん]
→ 115 a [で] 使う用のやつは、あれです…うんとね、今貯金
残高2万7千円 [くらい]
116 b [ほう] おうおう。
→ 117 a で [あの]
118 b [使って] いい用は？
119 a あの、カードの (うん)、ちゃう、カードの請求が (うん)
2万2千円 [だから]
120 b [ひイイイ↑] ヤバいんじゃない
121 a hhh、残り5千円ー [と違って]
122 b [ああ]、え、貯金用 [の方]？
123 a [貯金] 用は3万
ちよいくらい
124 b ああ、じゃあじゃあじゃあ
125 a 風前の灯火ーみたいな

例4. <50代夫婦の談話B>

- 63 c これは、ゴルフバッグ入れたのは3年くらい、会社の事務所
hhにあるのは5年くらい使ってるhh
64 d なんで、そんなんあんの？
65 c ひと冬だって5回くらいしかねえんだもんhh。
66 d だって5回ばっかしなんだ、お父さんに使おうかと思ったんだ。
→ 67 d で、明日何時ごろ帰ってくるわけ？
68 c んーと、3時。
69 d 頑張ってちょうだい、3時は未定だな

70c あ、○○いねえんであれば夕方になっけど

例3は、話者aの最近の金銭状況についての談話である。話者aのアルバイト代が未払であることに対して話者bは108で「オーノー」と同情を示しているが、話者aはそれに応じることなく、107aに続く内容として、109a「で、あとそっちはねー取っとく用の銀行口座に入ってる」と、「で」に続いて、お金を入れておく銀行口座についての説明を開始する。以降、115a、117aでも「で」のあとに、貯金用の口座と使っている口座の残高について情報を累加していく。以上の談話標識「で」は、いずれも『日本語大辞典第二版』（2000：p.1270）の（2）「前に示された内容を受けて、新しく発展させる」用法と考えられる。談話Aに出現していた残りの「で」1例も、例1に示したように、同様の用法と言える。また、話者aは、125a「風前の灯火ーみたいな」までに語られる自身の経済的状況の説明を続けるために、話し手としての役割を「で」によって保持しているとも考えられる。

一方、例4では、66dまで、事務所にある5年くらい使っているゴルフバッグについての会話が続いていたのが、話者dは、67dで「で、明日何時ごろ帰ってくるわけ？」と、突然全く新しい話題に転換している。この「で」は、「前に示された内容」を受けているわけではなく、「全く新しい話題を開始する」マーカーとして用いられていると言えるだろう。

以上のことから、談話標識「で」は、20代の友人同士には「前に示された内容を受けて、新しく発展させることを示す」とともに発話権を維持するために用いられ、50代夫婦には「全く新しい話題を開始する」ことを示すマーカーとして用いられていた。本稿では新たに確認された用法についての報告にとどめ、次稿以降に更なる詳細な研究を進めたい。

4.2.2 「でも」について

談話標識「でも」は一般に逆接の接続詞と認識されているが、その機能として、西野（1993）が「すでに一度話題にのぼった事柄を、再び話題として導入」（p.93）することを挙げ、また、稗田（2003：p.196）は次の点を指摘している。

逸れた話題から本筋の話題へと話を戻し、本筋の話題を始めるもの、本筋の話題を終わらせるものがあつた。先行研究において、すでに述べられた話題、既出の話題への移行が「でも」にあることが述べられていたが、今回「本筋の話題」という会話の目的に関係する話題が「でも」を契機とする談話移行に関わっていることが明らかになった。

(p.196)

20代友人同士の談話Aでは「でも」が7回使用されているが、このうち、稗田（2003）が指摘した「本筋の話題へ戻す」という機能に関わる「でも」が2回確認された。以下にその2例を示す。

例5.

- 27 a そう、直せるかなーって、だけどたぶん無理っぽい。
- 28 b ボンドは、ボンド、じゃねえや、接着剤
- 29 a いや [—]
- 30 b [接着剤] とかでも
- 31 a 頑張ればね、でも、あれっていつ買ったんだっけ？
- 32 a 高校生くらいの時だったから [もういいやって思っ
- 33 b [じゃあ、いいと思う、もう]

- 34 a そう、そうなの、そうなん [ですよ]
→ 35 b [でも] サンダルって壊れやすい
よね
36 a うん。
37 b うちも前履いてた、履いて歩いてる時にここのヒールが取れたことがある (hh)、ポコーってて、こけたの (hh)

この前の部分では、「aのサンダルが壊れたこと」について話が続けている。話者aの27a「そう、直せるかなーって、けどどたぶん無理っばい」という、壊れたサンダルを直そうとしたが無理だったという発話を受けて、話者bは28b、30bで接着剤を使って直すことを提案している。その案に対して話者aは、31a、32aで、頑張れば直せたかもしれないがサンダルの購入時期を考えるともう諦めてもいいと思ったと述べ、話者bも、33b「じゃあ、いいと思う、もう」と話者aの考えに賛同して、「サンダルを修理する」という話題は34a「そう、そうなの、そうなんですよ」で収束している。ここで使用された31aの「でも」は逆接として捉えられるが、次の35b「でもサンダルって壊れやすいよね」の「でも」は、逆接ではなく、「aのサンダルが壊れたこと」という本筋の話題へ談話を戻すために用いられていることが分かる。話者bは、そのあと37bで「うちも前履いてた、履いて歩いてる時にここのヒールが取れたことがある、ポコーってて、こけたの」と自分の同じ経験について話し始めている。つまり、本筋から逸れた話題が話し手である話者aによって収束したあと、それまで聞き手であった話者bが談話標識「でも」を用いて本筋の話題に戻してから、自分の「サンダルが壊れた」経験を続けている。この場合は、「でも」によって、話題を本筋に戻すとともに発話権を取ることに成功していると言える。

例6.

- 81 b もっかい買わなきゃじゃないの、[サンダル]。
- 82 a [そうだねー] どうしょっ
かな (hhhh)、今お金ないんだよなー↑
- 83 b サンダル、サンダル靴？
- 84 a ………サンダル。
- 85 b サンダル、後ろ留めんのか [ないやつか]。
- 86 a [そうそうそう] それはなんか
女の子、の、やつじゃない？
- 88 b 確かに、でも男の人も [履いてない]、最近。
- 89 a [いるか]
- 90 b 黒いやつでなんかアディダスとかの、なんか無駄にスポーツ
なやつ。
- 91 a なんかね、ちょっと小学生っぽい。
- 92 b hhh、そう、それでしかも一緒に靴下履く人いるから謎、
hhhh
- 93 a えーうん、[いるよね]。
- 94 b [謎な] ファッションhhhh
- 95 a そうそう。
- 96 b と思ってる。
- 97 a うん。
- 98 b でも、お金無いか。
- 99 a うん、いまね、あれなんです。
- 100 b バイト代ゼロでしょう？
- 101 a そう、今バイト休んでるから、サボってる [から]
- 102 b [TA代]

103 a TA代もね、あれだよ、遅れてるじゃんしかも。

例6では、81bまで、サンダルを買い替えなければならないという話題が展開されていたが、話者aはやや声を大きくして82a「今お金ないんだよなー」と言って、金銭的に余裕がなくて新しいサンダルを買うことが難しいことを話者bに伝えている。しかし話者bは、それには応じることなく83b「サンダル、サンダル靴？」と続け、そのあとa、b両者は96bまで、サンダルの種類について話を続けている。97a「うん」でその話題が収束すると、話者bは98b「でも、お金無いのか」と、「でも」を用いて、話者aが先に述べた82a「お金がない」という話題へ戻っている。99a以降は、話者aが、金銭的に余裕がない理由を説明し続け、例3に示した談話へとつながっていく。

例5、例6ともに、談話標識「でも」は、聞き手であった話者bが、先に話者aの持ち出した話題へ話を戻す際に用いられていた。これは、話者bの配慮として捉えられるのではないだろうか。西野(1993)が、「「でも」の場合、接続詞としての働きからか、以前に発話された事柄との関係が生じるために、流れを変えて話題を展開していく際にも、会話者間に緊張を引き起こさずに話題を展開させていくことができる」(p.94)と述べているように、「でも」を用いて相手が持ち出した話題に戻すことによって、発話権を取ったり渡したりする発話の順番取り(ターン・テイキング)に生じるある種の緊張感を和らげていると考えられる。

50代夫婦の談話Bには、このような談話標識「でも」の使用例は確認されなかったことから、一度話題にのぼった事柄を再度導入する談話標識「でも」の使用には、人間関係における配慮の必要性の有無が関係していることが示唆される。

5. まとめと今後の課題

本稿では、(1)「親しい人間関係」において用いられる談話標識に「親しさの程度」による違いはあるか、(2)「親しい人間関係」において用いられる談話標識に「世代」による違いはあるか、の2点を研究課題として設定し、20代友人同士の談話と50代夫婦の談話を用いて調査した。その結果、以下のことが分かった。

まず、談話標識の出現頻度は20代友人同士のほうがかなり多く、琴(2005a、2015、2018a)の指摘にある「高年層のほうが若年層よりも談話標識を多く用いる」という結果とは相反するものであった。各談話を観察したところ、20代友人同士は種々の談話標識やフィラーを用いて情報を伝えているのに対して、50代夫婦は、談話標識を使わずに全く新しい話題に転換する場面が見られた。これは、同じ高年層であっても、日常生活を共にする夫婦という「親密度の高い」人間関係の談話では、談話標識によって談話の展開を予測させたり、情報の共有を確認したり、円滑に会話を進めようと配慮したりする必要性が低いことが要因として考えられる。したがって、同じ「親しい人間関係」であっても、関係性が近ければ近いほど談話標識は使用されなくなる傾向が示唆される。

次に、20代友人同士に多く用いられた「で」と「でも」に注目し、それぞれの談話を質的に分析した。その結果、談話標識「で」は、20代の友人同士には本来の用法によって用いられ、発話権を維持する機能を果たしているのに対して、50代夫婦には「全く新しい話題を開始する」マーカーとして用いられるという、新しい用法が確認された。また、談話標識「でも」は、20代友人同士には、相手が一度持ち出した話題に戻す際に用いられており、発話の順番取りに生じるある種の緊張感を和らげるという「配慮」と捉えられる。それに対して、50代夫婦には、このような談話標識「でも」の使用例は確認されなかったことから、一度話

題にのぼった事柄を再度導入する機能の談話標識「でも」の使用には、人間関係における配慮の必要性の有無が関係していることが示唆される。

以上のことから、今回の調査によって得られた談話標識の用法の違いは、「世代差」というより「人間関係の親しさの程度」を反映したものと言えるだろう。

今回の調査は、20代友人同士と50代夫婦の各1組という限られた談話資料を対象としたケーススタディに過ぎないが、談話標識の用法の違いについて、上記のような手がかりを得ることができた。今後は、話者の年齢と親しさの程度を統制することによって世代差を明らかにするとともに、地域語の差異を統制した談話を採集する必要がある。データを充実させ、信頼性を高めることによって、談話標識の用法にはどのような要因が影響を及ぼすのか、明らかにしていきたい。

[付記]

本稿は、言語文化研究科2018年度「日本語教育特殊研究」と「日本語教育特殊演習」における授業レポートを発展させ、まとめたものです。談話資料を採集する際に、多大なる協力を友人、家族から賜りました。記して深く感謝申し上げます。

参考文献

- ※ここでは引用したもの以外に、参照した文献も含めて記載する。
- 岩澤治美（1985）「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号、pp.39-50、
日本語教育学会
- 小野寺典子（1992）「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』11（10）、pp.26-38、明治書院
- 川崎晶子（1983）「夫婦の会話一言語運用の意識と実際一」『言語学論叢

(2)』 pp.77-91

琴鍾愛 (2005a) 「仙台方言における談話展開の方法の世代差—談話標識の出現傾向から見る—」『東北文化研究室紀要』46、pp.43-59、東北大学文学部東北文化研究室

琴鍾愛 (2005b) 「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1 (2)、pp.1-17、日本語学会

琴鍾愛 (2015) 「日本語における談話展開の方法の世代差—説明的場面で使用される談話標識の出現傾向から—」『언어연구 30권 4호』 pp.733-747、한국현대언어학회

琴鍾愛 (2018a) 「大阪方言の談話展開の方法の世代差—説明的場面で使用される談話標識の出現傾向に注目して—」『日本文學』第80輯、pp.1-17、日本語文學會

琴鍾愛 (2018b) 「若年層における談話展開の方法の地域差—東京方言、大阪方言の比較を中心に—」『コミュニケーションの方言学』 pp.229-247、ひつじ書房

梅棹忠夫他 (2000) 『日本語大辞典 第二版』 p.1270、講談社

小池生夫他 (2015) 『応用言語学辞典』 p.280、研究社

小林美恵子 (2018) 「「夫婦のことば」 ちょっとのぞき見」遠藤織枝編 『シリーズ日本語を知る・楽しむII 今どきの日本語—変わることば・変わらないことば—』 pp.63-81、ひつじ書房

西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』12 (5)、pp.89-96

高崎みどり他 (2008) 『ここからはじまる文章・談話』 p.127、ひつじ書房

林宅夫 (2008) 『談話分析のアプローチ—理論と実践—』 pp.139-141、

研究社

稗田三枝 (2003) 「会話の展開と談話標識—談話標識「でも」に焦点を当てて—」『日本語・日本文化研究』第13号、pp.193-202、大阪外国語大学日本語講座

比嘉正範 (1982) 「会話構造の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第5巻文化と社会』 pp.83-106、大修館書店

本田朋子 (2016) 「自然発話にみられる重なるの諸相—親しい関係の日常会話から—」現代日本語研究会遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編『談話資料 日常生活のことば』 pp.295-308、ひつじ書房

Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press

